《資料》

竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介

矢野環
福田智子

一　はじめに

十八世紀の香道を語るとき、菊岡沾涼『香道蘭之園』（元文二年〈一七三七〉頃の成立）全十巻を欠かすことはできない。そのうち第八・九巻に収められているのが、『源氏物語』に依拠する組香伝書「源氏千種香」である。その後、この蘭之園本「源氏千種香」を参看して新たに著されたのが、安永二年（一七七三）の自序をもつ、竹幽文庫蔵『源氏千種香』であった。

筆者らはこれまで、この竹幽文庫蔵『源氏千種香』について、十回にわたり紹介してきた[1]。この本は、「香道籬の菊　源氏千種香　其外数品入」と上書きされた桐箱に入った状態で伝来しており、箱の中には上書きどおり、『源氏千種香』の他に、『香道籬之菊』と題する組香伝書も収められている。

竹幽本『香道籬之菊』は、宝暦六年（一七五六）二月、「林花堂主人英子撰」の序文と、翌宝暦七年五月、「扇軒雲栄」の跋文をもつ。本の装丁や筆跡などから見て、竹幽本『源氏千種香』と同時期に作成されたと見られる。本稿では、竹幽本『香道籬之菊』の序文・跋文と内容の構成を中心に、その概要を紹介する。

なお、翠川文子氏『香道文献目録―所蔵館別―』（香書双書資料1）[2]は、日本全土にわたる香道伝書の所在を網羅することを意図した労作である。その目録に、書名はもとより、関係する人物名も見出されない本書を紹介することで、香道研究の一助とすることができれば幸いである。

二　書誌

竹幽本『香道籬之菊』は、礼・楽・射・御・書・数[3]の六巻六冊から成る。いずれも料紙は楮紙で、袋綴じの写本である。表

紙は、紺色布目地に金泥菊花下絵。鳥の子内曇の金切箔散らしの題簽に、「香道籬之菊　禮」というように外題を記す。

大きさはいずれも、縦二六・二センチ、横一六・六（センチ。竹幽本『源氏千種香』と同じと見てよいであろう。

本文の前後に、各二丁の遊紙がある。内題あり。墨付は、礼之巻百六丁、楽之巻百二丁、射之巻九十五丁、御之巻九十一丁、書之巻百一丁、数之巻九十丁。いずれも一面七行書きを基本とし、各丁に匡郭が墨で施されている。

礼之巻のはじめに、「林花堂主人英子撰」とする宝暦六年（一七五六）の序文が載り、冒頭には「不如学」、末尾には「林花堂」の朱印がある。また、数の巻の最後には、「扇軒 雲栄」なる人物の宝暦七年五月の跋文があり、末尾には「字曰其義」の朱印が存する。

さらに、『香道籬之菊』と一体をなすとみなされる二件の写本が前述の桐箱に同封されている。一件はほぼおなじ装丁の『香道調度図』であり、もう一件は重要な口伝を記した横本の『截紙傳七箇條　秘記』である。

『香道調度図』は一丁内題に「香道具之圖　林花堂著述」として、三十四丁表まで諸道具を記載する。三十四丁表から三十九丁表までは長緒の結びを、三十九丁裏は「薫物包」を記載する。四十〜四十三丁は匡郭のみの白紙である。四十四丁に「明和八歳次辛夘清和中浣　英子撰（印）」とある。

『截紙傳七箇條　秘記』は内題に「截紙傳七箇條　志野流」とあり、『香道籬之菊』禮之巻の第四箇条「截紙傳七箇條目録」記載の条目の内容が記載されている。全体は十二丁とその前後の遊紙からなる。表紙の料紙は『香道籬之菊』と同じである。末尾に識語と「英子書」とする宝暦九年（一七五九）の年紀がある。

それに加えて、後述の『香道賤家梅』の秘伝を為す『香道賤家梅　秘記』が桐箱には含まれている。『截紙傳七箇條　秘記』と全く同じ寸法の横丁であり、本文十五丁と前後の遊紙からなる。末尾に識語と「文龍撰」とする寛延二年（一七四九）の年紀がある。しかも、表紙は現在東京国立博物館所蔵となっている『香道賤家梅』と同じデザインの料紙である。

三　序文および跋文

竹幽本『香道籬之菊』（以下、『籬之菊』と呼ぶ。）は、序跋から、その成立をおおよそ把握することができる。以下、序文とその直後に記される書名の由来となる和歌、および跋文の翻字を示す。翻字には、一面の終わりに〝」〟を付して、巻と丁数、表裏の区別を記す。また、適宜句読点を施し、濁点は底本に存するもののみに限ることとする。

【翻字】

叙

［印］

普く香の道は尊鄙にかよひ、風雅を本とし、炉上の煙高く登りては冨士・浅間も麓に見なし、やことなき業を、くだりては蚊やりたて軒にてくゆらすこと、昔より今にして誰か独しらざらん。此故に、月の」礼一オ 桂の影たかき及びなき雲井の御調度を庭たつみのかげに写し留て、すさめる其品のいみしき事ども假初にもおろそかにすべからす。往し寛延の頃ほひ、文龍子の組香二百有餘品を撰み、冊子となし、賎家梅と題してひめ置れぬ。吾亦爰に記し侍る条〳〵は、いにしゑ」礼一ウ 人の著したる傳書、或は花に遊ひ月に興し、三葉一花の風流を惣して、近世梓にちりばめたる数にも拾残せし玉の露ばかりを、せばき袂にあつめ、あまれるを除き足らざるを補ひ、漸く備ふをひとり燈の本にせんも本意なく、此道の好人に月雪花の」礼二オ 詠の外なる翫ひともなさしめは幸甚しからむと、拙き文に綴り集め侍る而已。

寶暦六のとし

子如月吉日

林花堂主人英子撰［印］」礼二ウ

新千載和歌集

後宇多院御製

千世ふへききくの籬に

色そへて

花ゆへかほる秋の白露」礼三オ

（半丁白紙）」礼三ウ

跋

籬の菊の書たるや、此道の普く世に行はるゝにつきて、林花堂のあるし、諸流の門を敲き秘奥を探り、傳書口訣のおごそかなるをも残さず、組香数品をあつめ訂補潤色して一篇と」数八九オ なせり。實に後世の至寶といふべし。翁もふるき友どちにて、共に焚香を弄し、たのしみを同しうす。是がために後序せよと、固辞すれども許さず。芝蘭の交りを荊棘に破んも本意なく、夫子の丹誠感称の余り、みだりに」数八九ウ 禿毫を噛んで書添る事と成りぬ。

寶暦七丑年　扇軒

皐月中院　雲栄述（印）」数九〇オ

（半丁白紙）」数九〇ウ

『截紙傳七箇條　秘記』十二丁裏には次の通りにある。

右切紙傳者坂内宗拾以来相承シテ而　雖トモレ為ニ當流ノ極秘一タリト
今干レ茲模寫シ畢ヌ　聊不レルコト可レ有ニ他見一専要也

寶暦九稔卯林鐘吉旦

英子書（印）

『籬之菊』の序文における和歌は、『新千載和歌集』巻第五秋歌下五三一番歌。「弘安七年（一二八四）九月九日亀山院に、籬菊露芳といふ事を講ぜられけるに、位におましましける時たてまつらせ給うける」という詞書の後宇多院御製である。[4]

　序文の内容でまず注目されるのは、「文龍子」によって撰集された「賤家梅」という組香伝書の存在であろう。これは世に知られる牧文龍『香道賤家梅』（以下、『賤家梅』と呼ぶ。）を指すと見られる。いま、『香道の歴史事典』（神保博行氏著、柏書房、二〇〇三年六月）から、その説明文を抜粋引用する。

　　こうどうしずがやのうめ　香道賤家梅

　牧文龍識書。序によれば、諸流をあつめ寛延元（一七四八）辰夷則日に書かれた。（中略）豪華な製本で書は端麗、画も華麗な彩色であり、それぞれ専門家の手になること間違いない。『蘭之園』（『香道蘭之園』を指す……筆者注）が幾許かの写本をもつのに対して『賤家梅』は異本を知らない。特定の貴人のためにつくられた特製本であろう。保存もよい。（中略）著者については城南牧文龍とあるが、この人物は今のところ不詳。組香や道具にわざわざ志野流、慈照院殿流、相阿弥流と断ってあるところがあるから、それ以外の流派であろうが、元来香道には家元制を確立した志野流以外、流派の意識がないのが常態であったため、牧文龍は御家流の香人であったと考えられる。

すなわち、『賤家梅』は、十八世紀半ばに、牧文龍なる人物が、その頃伝えられていた香道の作法や組香の方法を、流派にとらわれず収載した書である。なお、江戸時代には烽谷―藤野家以外に複数の志野流が併存していたことに注意しておく。

　『籬之菊』は、この『賤家梅』を受けて、『賤家梅』成立から八年後に撰集された本ということになる。序文に「林花堂主人英子撰」とあるが、この人物も『賤家梅』の牧文龍同様、現時点では未詳という他はない。また、数の巻の最終丁には、序文が書かれた翌年、宝暦七年五月の「扇軒 雲栄」による跋文が載るが、この「雲栄」なる人物も未詳である（あるいは、『源氏千種香』の編者「其山」と同一人物かもしれない）。「翁もふるき友どちにて」とあることから、「林花堂主人」の友人で、すでに

老齢であったことは窺い知ることができる。

なお、跋文に拠れば、「林花堂のあるし」は「諸流」の秘説や奥義を博捜していたという。これは、『賤家梅』の牧文龍が、前掲『香道の歴史事典』でも指摘されているように、志野流、慈照院殿流、相阿弥流といった複数の流派の説を包含しているのにも通じる、香道に対する姿勢であろう。また、『秘記』にある「坂内宗拾」は志野流中興。かつ米川流の祖、米川常白の師とされる人物である。

また、『籬之菊』が『賤家梅』を強く意識して編纂されていることは、その書名からも推察されるところであるが、両者の共通性は、序文の直後に書名の由来となる和歌一首を載せるという点にも端的に表れていよう。『賤家梅』の影印は、神保博行氏『香道について』を附録として発行されている（知道出版、二〇一四年三月）。これに拠って、『賤家梅』に載る当該歌一首を示そう。

（序文略）

寛延元辰のとし夷則日

武陽城南

牧文龍識書

（印1）（印2）

新後拾遺和歌集

いつくそと梅の匂ひを　尋れは

賤か垣ねに　春風そ吹

この歌は、『新後拾遺和歌集』巻第一春歌上四二番の歌で、「嘉元元年（一三〇三）たてまつりける百首歌に、梅」という詞書中の一首。己心院前摂政左大臣（九条師教）の詠である。[5]

竹幽文庫本『香道賤家梅　秘記』は、内題では「志野流七箇傳秘記」としているが、六つの組香に対する秘伝（星合香について、単なる札物と、盤物の二通りを詳細に解説している）と、「焼合十炷香」「連理香」の秘伝を記している。その奥書は次の通りである。

此一冊不可有外見候　若至而志深於執心之輩者　其の覚悟見届可為相伝事也

寛延二己巳年初夏中澣

文龍撰

（印）[6]

例えば『賤家梅』十四巻の「蹴鞠香」の盤においては、「人形配り　習ひ有」「四本樹立様　習ひ有」となっているが、『香道賤家梅　秘記』において詳細に説明されている。つまり『賤家梅』は本書を含めて初めて完全なものとなるのである。

四　構成

『籬之菊』は、前述の通り、礼・楽・射・御・書・数の六つの巻、六冊から成る。次に、礼之巻冒頭に載る総目録を示そう。

香道籬の菊総目録
　禮之巻
　　百炷聞之法
　　三花集抄抜書
　　十組盤名目
　　截紙傳七箇條目録
　　秘傳二箇條目録」礼四オ
　　志野流百箇條聞書
　　丁字風爐剤法
　楽之巻
　　福寿香　桜香　二哥香
　　土金香　残月香　蝉丸香
　　蟲撰香　八重垣香」礼四ウ　長月香
　　待宵香　月見香　新名月香
　　十六夜香　八雲香　雲井香
　　白川香　木所ウ客香　難題香
　　貝追香　駒止香　替玉川香
　　竜田川香」礼五オ　鈴虫香　靏龜香
　　四藝香　きゞす香　一声香
　　五行香　断連香　六歌仙香
　　生尅香　十葉三花香　慶賀香
　　連誹香　新菊合香　志賀香」礼五ウ
　　初恋香　梅園香　中川香
　　當座香　三箇香　新月見香
　　寝覚香　替三景香　名所鵜川香
　　四季歌合香　半蔀香　天の川香
　　皐月香　陸奥名所香」礼六オ　大井川香
　　外山路香　新六歌仙香
　射之巻
　　深山香　十三夜香　宇治拾遺香
　　五月雨香　異五月雨香　時雨香

異時雨香　四季三詠香」礼六ウ　三種加客香
白菊香　十一種香　夕暮香
一陽香　水無月香　四節こずへ香
蓮葉香　花香　芳野香
異雪月花香　三神香　三友香
福山香」礼七オ　梅花香　神枕香
玄猪香　左義長香　京極四町香
雨月香　近江八景香　深山木香
神垣香　松花香　初夢香
松月香　礒鵆香　新時鳥香」礼七ウ
蛙香　妻乞香　名水香
濱荻香

御之巻

梅源氏香　冬夜香　軒端萩香
安宅香　重陽香　枝折香
八幡山香　玉章香」礼八オ　賓客香
花楓香　恋艸香　梅がゝ香
小蝶香　夘花香　三體和歌香
新時雨香　三詠香　桃園香
小男鹿香　仙洞香　高砂香
待乳山香」礼八ウ　月宴香　花野香

白梅香　隅田川香　鸚鵡返香
對待香　忍音香　女志呂香
鶏舌香　雁金香　和哥始香
轉任香　常盤香　邯鄲香」礼九オ
秋野香　十五夜香

書之香

三千歳香　季春香　花月名所香
桜香　嘉祥香　新忍香
難波名所香　補任香　小倉御幸香
新蛙香」礼九ウ　二炷開月見香　四節時鳥香
新七夕香　汐干香　初後香
花鳥風月香　常盤木香　寶舩香
千歳香　蓬莱香　三舟香
小町香　前栽合香　牡丹香」礼一〇オ
千引香　相撲香　和歌浦香
観菊香　彼岸香

数之巻

三山香　八的香　知音香
曲水香　鷹狩香　楓橋香」礼一〇ウ
壽浮木香　射鳥香　春日山香
花睡香　扇争香　舞姫香

五條香　　菊花香　　香花香
四睡香　　詩歌香

畢」一二オ

（半丁白紙）」一二ウ

礼之巻には七つの作法、楽之巻以下五巻に組香が収められている。楽之巻には五十三の組香が収載されているが、すべて答えは名乗紙を用いる。次の射之巻は、答えには主として十炷香札を打つ。全四十の組香のうち、「異五月雨香」「蛙香」「妻乞香」の三つは、札と名乗紙を併用する。御之巻には三十八の組香が収められ、十炷香札を用いるものがほとんどであるが、「對待香」のみ歌骨牌（うたかるた）を用いる。書之巻の二十九の組香では、十炷香札以外の変わり札を用いるものが多くなり、また、「蓬莱香」以下は盤物である。数之巻はすべて盤物で、十七の組香が見える。盤物は、合計で二十七に及ぶ。

　このように、楽之巻以下の百七十七の組香は、その答え方や内容により、名乗紙、札（十炷香札・変わり札）、盤物というように、大まかに分類されていることがわかる。その方法も、やはり『賤家梅』に倣ったものと見られる(7)。しかし、組香の選択方針はかなり異なっている。つまり、『賤家梅』は『蘭之園』の改変拡張の如く、基本的な組香も含めているが、『籬之菊』は通常の組香などは一切含まず、個性のある組香のみを記述している。

『香道調度図』は、前述の通り、道具図と結図からなる。この道具図は一見すると『賤家梅』巻十三の「香諸道具之圖」と同様に見える。しかし、『賤家梅』がほぼ『蘭之園』巻十の引き写しであるのに対して、『香道調度図』はかなりの相違があり、独自性を有している。

『截紙傳七箇條　秘記』は次の項目からなる。

正傍点之事、五味香考之事、四季香之事、陰陽香之事、六國立香傳之事、名香立六十種之事、薫物秘方之事

たとえば最後の「薫物秘方之事」は、薫物の由来とともに、薫物研究では著名な、転法輪三条公敦から後土御門院への薫物献上での和歌のやり取りなど(8)を含めている。

五　おわりに

以上、『籬之菊』の序文・跋文および内容構成の概略について、検討を加えてきた。その中で、やはり最も注目すべきは、『賤家梅』との密接な関係であろう。本稿冒頭において、『籬之菊』が収められた桐箱の上書きに、「香道籬の菊　源氏千種香　其外數

品入」とあることにはすでに触れたが、その箱に収められている書として、『香道調度圖』『截紙傳授七箇條 秘記』『香道賤家梅 秘記』についてはすでに述べたように重要な意味がある。それによって、『香道賤家梅』の本来の完全な姿がわかるとともに、『香道籬之菊』が独自な観点で編纂された重要な香道書であることもわかった。

桐箱にはそれ以外に、『名香目録』や『諸組香目録』などが収蔵されているのである。これらを含めて、『香道蘭之園』をも視野に入れた内容の検討を、今後さらに進めていく必要があろう。これにより、十八世紀の香道のあり方が、さらに明らかになってくるであろう。

また、これほどまとまった数の組香を考察の対象とすれば、その素材として、和歌や『伊勢物語』『源氏物語』などの古典文学がどのように用いられ、この時期の教養として享受されていたかという点にも迫ることができよう。

以上の点については、すべて今後の課題としたい。

附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、平成25～27年度）における研究の一部である。

注

（1）『社会科学』第四十三巻第三号（二〇一三年一一月）～第四十六巻第一号（二〇一六年五月）。

（2）二〇一五年二月、清水書院、非売品。

（3）士大夫が修得すべき教養「六芸」を巻（冊）数に充てた。『周礼』に拠る。

（4）『新編国歌大観』に拠る。

（5）注4に同じ。

（6）この印は本体序文の（印2）と同じである。

（7）『賤家梅』には、巻二から巻十二まで、十一の巻に二百三十一の組香の方法が列挙されている。巻二には二十五の組香が載るが、冒頭の「十炷香　有試・無試」は十炷香札を用い、残りの二十四の組香はすべて名乗紙を用いる。次の巻三、二十五の組香はすべて名乗紙で答える。巻四からは主として札を用いる。巻四の二十八の組香はすべて十炷香札を使い、巻五では、二十の組香のうち一一番目の「忍香」からは、十炷香札ではなく、独自の変わり札を用いる。巻六の二十の組香も、引き続き独自の札で答えるが、二〇番目の「新撰六義香」は短冊を使う。巻七の二十五の組香は十炷香札、巻八の二十三の組香のうち、二〇番目の「川並香」より変わり札を用いる。盤物は、巻九から巻十二までの六十五の組香に及ぶ。

（8）「薫物秘方之事」に記される和歌本文は次のとおり。

左近大将公敦

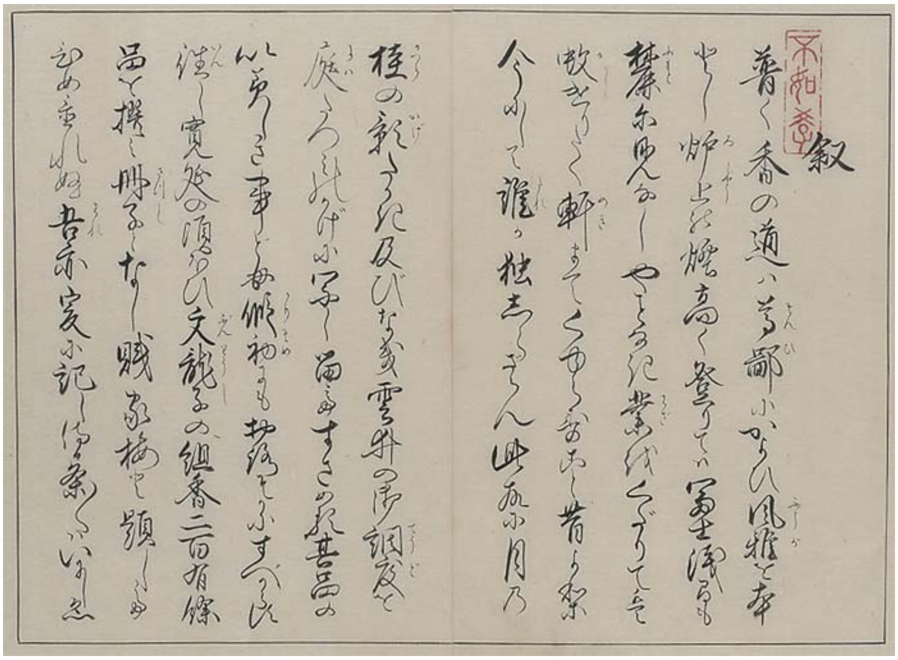
たき物の代々の匂ひの家の風
今ぞ雲井に吹つたへぬる

御返

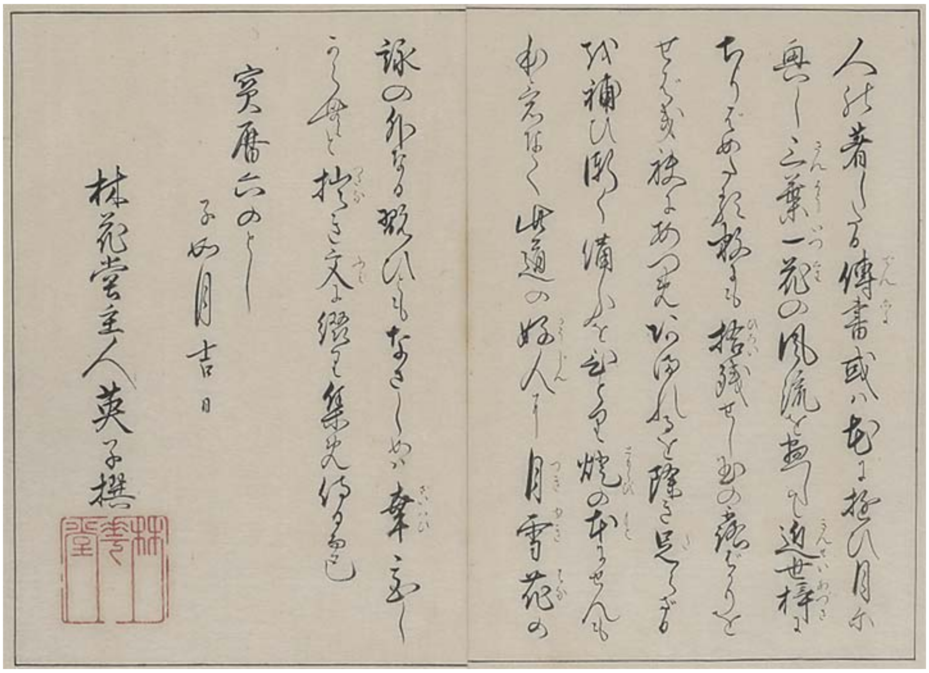
後土御門院　御製

たき物の高き匂ひを雲の上に
つたふる風のたよりうれしも

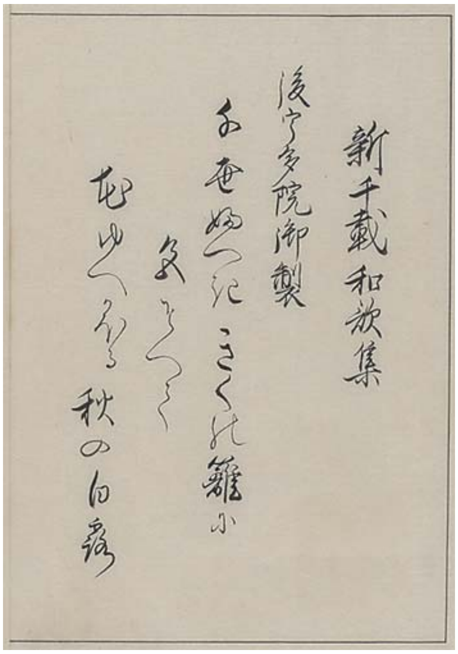
【影印】綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。



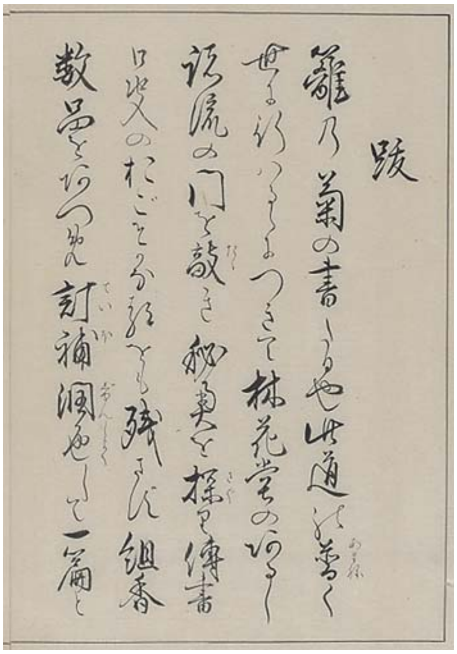
（礼・一丁表）（礼・一丁裏）



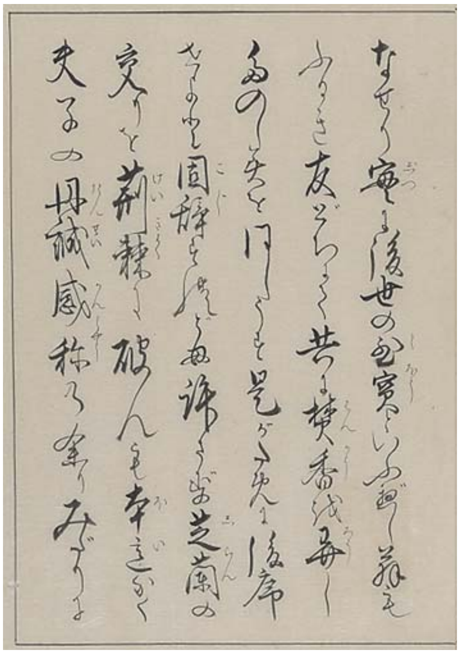
（礼・二丁表）（礼・二丁裏）



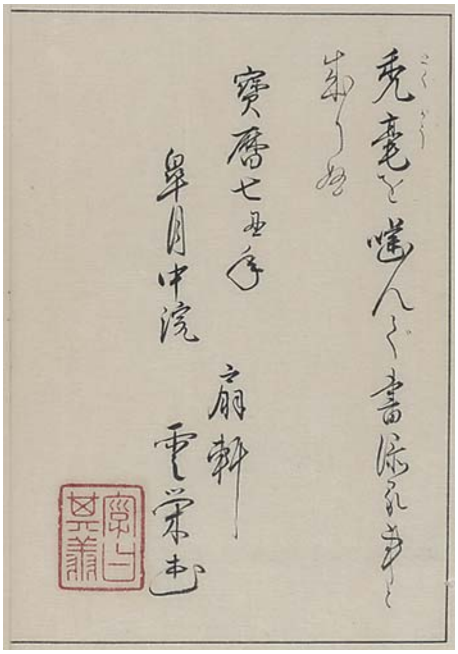
（礼・三丁表）



（数・八十九丁表）



（数・八十九丁裏）



（数・九十丁表）